時評

「歌壇」三月号

黒岩剛仁

「歌壇」三月号では、毎年恒例の「アンソロジー二〇一一　テーマ別私の一首」の特集が組まれていた。例年、この特集は、知り合いや注目している歌人たちが、どのテーマの一首で前年の自らの営為を代表させているか、との興味でパラパラと飛ばし読みする程度だったのだが（奥田編集長、ゴメンナサイ！）、「二〇一一」が付いている今年は、やはりそういうわけにはいかなかった。それは、後半に掲載されている二編の特別評論の一つが、佐藤通雅による「震災詠からみえてくるもの」だったことにも因るのかも知れない。

佐藤の評論では、被災地近くにいた彼ならではの視点から、いくつかの注目すべき指摘がなされていたが、私は次に挙げる彼の三つの見解を共感しつつ胸に留めた。

現地がなぜかくまで衝撃的であるのか、私はしだいにわかってきた。それは、すべてを等身大の視線に還元し、したがって災害の途方もない巨大さを実感させるからだと。そしてまた、ついさっきまで営まれていた人々の生活も歴史も一気に消し去り、生者を死者へとたやすく変換させてしまう、まぎれもない現場だからだと。

それゆえ、佐藤は、可能な人には現地に立つことを勧めるのだと言う。

（前略）逃げ場のあるものと無いものの格差があからさまになったことは否定しようがない。だが、かなりの危険地帯ならともあれ、自主判断地帯でのことに問題を絞れば、将来どちらが有利に働くかは、誰にもわからない。ただ、自分の選んだことを背負っていくしかないといえるのみだ。

被災地から遠く避難した人たちをいく分突き放してはいるが、これも冷静かつ貴重な意見だろう。

もう一つは、短歌に直接関わる指摘なのだが、「短歌研究」の「二〇一一年歌壇展望座談会」において、島田修三が『支那事変歌集』の兵士たちの歌と『大東亜戦争歌集』の著名歌人たちの歌を比べ、「現場にいる人たちの肉声を伝えてくるときに圧倒的に短歌は強い」と発言していることに触れた上で、「今回の震災詠は、なによりも短歌大衆のものだったということ、そしてすべての人が逃げ場のない所で、満身創痍で生み出したということだ」と、自らが選歌を担当している「河北新報」の短歌欄に寄せられた震災詠の力を認めている点である。

では、アンソロジーから。作者は順に、青沼ひろ子、千代治子、柏崎驍二、なみの亜子、齋藤芳生。

・波の手の黒い指先まっ黒い水が地面を這い上ってくる
・何ごともなかつたやうに蒼き海さざ波たちてひかりを返す
・ながされて家なき人も弔ひに来りて旧の住所を書けり
・まだ死に足りないというのですか春雪に芽立ちはなべて震えて屈む
・連翹の枝を挿すなり父祖の土地の放射線量を測るかわりに